特集

私の道にスペイン語があって。

El español en mi camino

スペイン情報誌『acueducto』はこの40号で創刊10周年を迎えました。2010年の創刊当時から、多くのスペイン語圏文化の専門家の皆様に支えていただき、充実した雑誌を刊行し続けることができました。紙媒体最後となる今号の特集は、長らくご連載いただいた執筆者の皆様の、スペインや中南米との出会い、スペイン語をめぐる回想録です。どうぞお楽しみください。

はじめてのスペイン 半世紀前の備忘録として

川成洋

Yo Kawanari

全体主義体制の国を見てみたい。具体的には、スペイン内戦の勝利者フランコのスペインとはどんな国か。これが私をスペインに向かわせた動機だった。

1969年7月上旬、私ははじめてスペインの大地を踏んだ。

その日の朝9時頃、国境の町ポル・ボウに着いた。入国審査所には国境警備兵、それにフランコの親衛隊と、影口を叩かれている武装した治安警備隊がじっと入国者たちを見つめていた。これぞ、全体主義の国と私は思った。

入国者たちはドイツで働いている出稼ぎ労働者だと思うが、全員、白地にグレーかブルーの縞入りの大きな風呂敷包みを体の前と後ろにかけ、神妙な顔つきをして長蛇の列をつくっていた。実はフランスからスペイン国境に向かう列車の中で一緒になった。休暇で故国に帰るのだからうるさいのは仕方がないと思っていたが、ここでは全く別人になっていた。荷物の持ち込みの検査は厳重だった。彼らは検査用デスクの上に風呂敷をほどくと、その荷物の中味は一目瞭然、検査官にはいたって都合がいい。検査後、荷物をもとのように包むには相当手間暇がかかる。やれやれと思いつつ最後尾についていた私の「カニ族」スタイルを一目見た検察官がニヤリとOKサイン。

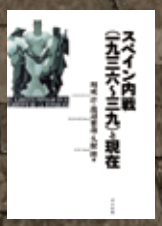
さっそくバルセロナへ向かった。駅から出たところにホテル案内のプレートがあり、駅近くの安ホテルに投宿した。すぐ19世紀後半に花咲いたモデルニスモ建築の揺籃の地「アシャンプラ（拡張地区）」へ出かけた。ここにモデルニスモの記念碑的建造物がひしめき合っているのだ。ついで、アントニ・ガウディのサグラダ・ファミリア教会。驚いたことに、建築途上の高い建物であったが、工事中の音や人の動きもなく、資材置き場ではないかと思うほど閑散としていた。そういえば、ガウディもこの教会建設の資金切れで何回も工事を中断したのだった。

マドリードの喧騒はすさまじかった。連日連夜のサイレン。それも四方八方からまるで飛んでくるようだった。それに、市内のいたる所で眼を光らせている武装警官や治安警備隊員。おそらく私服の公安刑事もいるはずだ。フランコ体制の屋台骨が大きくぐらついているのだろう。反体制勢力への苛烈な弾圧と現体制側への強力な梃入れなど

プロフィール

1942年札幌で生まれる。北海道大学文学部卒業。東京都立大学大学院修士課程修了。社会学博士（一橋大学）。法政大学名誉教授。スペイン現代史学会会長、武道家（合気道6段、居合道4段、杖道3段）。書評家。主要著書：『青春のスペイン戦争』（中公新書）、『スペイン―未完の現代史』（彩流社）、『スペイン―歴史の旅』（人間社）、『ジャック白井と国際旅団―スペイン内戦を戦った日本人』（中公文庫）他。

Libros principales（主な著作）



スペイン内戦（一九三六～三九）と現在
川成洋 渡辺雅哉 久保隆 編
ぱる出版
2018年6月刊
定価5,800円＋税

ガルシア・ロルカの世界
川成洋 坂東省次 本田誠二 編
行路社
1998年9月刊
定価2,400円＋税

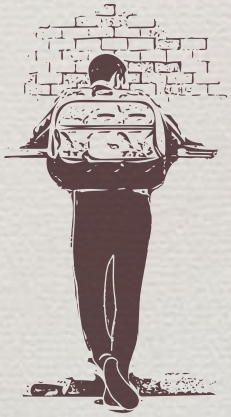
España por primera vez, como un recuerdo de hace medio siglo.

で対峙している。聞くところによると、学生デモを鎮圧する警官隊の放水には青い塗料が混入されていて、それが皮膚や衣料に付着するとなかなか落ちないので、デモ参加者は翌日でも逮捕されてしまう。

ラス・ベンタス闘牛場で、タイミングよくというべきか、たまたまフランコの闘牛見物日であった。正門のゲート付近は武装警察隊や騎馬警察隊による重警備態勢。とにかく近づけない。仮にフランコをピストルで射殺しようとしても、その射程距離に侵入できないとのことだ。

暑いマドリードからグラナダへ向かった。グラナダでは警官の眼は相変わらず鋭かったが、けたたましいサイレンはなかった。駅近くのホテルにチェックインして、ロルカが愛したグラナダの町を散策した。「アルハンブラの情景を、その運命と重ね合わせ。そのような状況で眺めたい人は夕暮れに行くとよい」と言ったのは、ワシントン・アーヴィング。昼から夕方にかけて、アルバイシンから眺めるアルハンブラ宮殿の全景は陽の残光や空模様が一刻一刻と様変わりする、ちょうど男盛りから老耄へと次第に変わっていくようだった。これも人生なりかと達観。実際に、滅びることを運命づけられたナスル王朝のアルハンブラ宮殿を歩きまわり、駅前のバールに立ち寄った。そこで、たまたま隣席の英語を喋る40歳くらいの市役所職員と雑談した。彼は相当のインテリで、しかも現政権に批判的だった。それでも私は警戒して「フランコ」という名詞を口にしなかった。独裁者の名前はタブーだから。だが、ビールのせいか、あるいは話し相手への油断からだったのか、ロルカの名前を喋ってしまった。すると、今まで穏やかな彼が、突然、真っ赤になって、スペイン語でまくし立ててきた。よく聞き取れなかったが、ロルカのことで気が変わったのは間違いなかった。こんなことで、治安警備隊員に捕まったら、万事休すだと思い、ともかくそれを否定してその場を繕い、一目散にホテルへ退却。その夜、ホテルの自室から出る気がしなかったのは、言うまでもない。

――それから半世紀が経ったスペインとは。フランコの死去（1975年11月）から、スペインは着実に民主化、社会化、欧州化が進み、わけてもEU加盟とNATO加盟により、スペイン陸軍はNATO軍の一翼でもあり、1841年から1936年まで実に202回も勃発したプロヌンシアミエント（軍事クーデター宣言）も起こさず比較的安寧状態が続いている。昨年10月、フランコの棺も「死者の谷」から搬出され、家族の眠る墓地に移された。これでようやく内戦の傷も癒えるのではないだろうか。



ジャック白井と国際旅団
―スペイン内戦を戦った日本人
川成洋 著
中央公論新社
2013年10月刊
定価819円＋税（版元品切）

Artículos publicados en ACUEDUCTO（一部抜粋）

○第01号 **「セビリア再訪――その個人的な点描」**
○第02号 **連載「ゲルニカをめぐる3つのエピソード」「ゲルニカ異聞」「ゲルニカ備忘録」**
○第11号 **「ヘミングウェイ～アメリカの大文豪誕生の地・パンプローナ～」**
（特集「牛追い祭りの街、パンプローナ」）
○第15号 **連載「スペイン内戦が生んだ「ロバート・キャパ」」第1話-第17話**
○第27号 **特集「スペイン内戦とは何だったのか」**
○第30号 **連載「おススメLibros」**
○第31号 **「フェデリコ・ガルシア・ロルカ賛歌」**（特集「ロルカを思う。」）

La cocina española y yo

スペイン料理と私

渡辺万里

語学が得意だったことは一度もない。それなのに、スペイン語だけはなぜか続けることができたのは、語学のクラスではなく、政治学科の「中南米の政治経済」というテーマのゼミで、ペルーの新聞記事を読むことからいきなり始めさせられたからだと思う。「語学は目的ではない、手段だ」と説く比較政治学の教授のおかげで、私は「スペイン料理を知るために」スペイン語を学ぶという選択肢を手に入れたのだ。

それからほぼ40年。スペイン語のレベルは大して上がらなかったけれど、スペイン中のシェフたちと友達になれた。彼らと、スペイン料理の世界が大きく揺れ動き変動していくエキサイティングな20年を体験することができた。少なくとも食についてなら、彼らと議論もできる。だから私のスペイン語は、十分に目的を達したことになる。

しかし、どんなに有名なシェフたちと知り合ったにしても、私に「食とは何か」を教えてくれたのは、スペインの女性たちだったと思う。最初の出会いは、北の海辺の町サンタンデールで民泊して語学を学んでいたときのお母さん、ファニータだ。

ファニータの口癖は、「¡Aquí no se echa nada!（この家では何も捨てないのよ）」。鶏のガラでスープをとった後、その肉で最高に美味しいクロケッタス（コロッケ）を作る。安いアンコウの頭を買ってきてレストランに負けない風味のスープを作ったら、アンコウの肉をこそげとって米料理に入れる……。そんなファニータの料理を子供たちと奪い合って食べながら、私は「貧しくても豊か」という言葉の意味を教えてもらった。勉強が好きな中学生だった次女のトリニとは今も付き合いがあるが、彼女は「ママの料理をちゃんと覚えたのはマリのほうね、私が作るよりママの味がする」と言ってくれるのを、私は何より嬉しい褒め言葉だと思っている。

約30年前の、
ファニータの
次女トリニと筆者。

プロフィール

大学時代にスペインと出会い、その後スペインで食文化の研究に取り組む。1989年、東京に『スペイン料理文化アカデミー』を開設しスペイン料理、スペインワインなどを指導すると同時に、テレビ出演、講演、雑誌への執筆などを通して、スペイン食文化を日本に紹介してきた。「エル・ブジ」のフェランを筆頭に、スペインのトップクラスのシェフたちとのつきあいも長い。著書は『毎日つくるスペインごはん』（現代書館）、『スペインの竈から』（現代書館）、『修道院のウズラ料理』（現代書館）、など。

academia-spain.com

リオハの料理人、ティナ。

マドリードの料理の恩師、ピラール。

もう１人、各地をまわって料理の勉強をしていた時期の私に深い印象を残したのは、リオハの老舗のボデガの厨房で働いていたティナだ。社長のお気に入りの料理人だったティナは、ボデガを訪れる大勢のお客さんのための料理をほとんど１人で作っていて、私は何日も彼女の手伝いをさせてもらって料理を覚えた。彼女の口癖は「¡Cocina es cariño!（料理は愛情よ）」。食べる人に喜んでほしいと思う愛情が料理を美味しくするの。ティナはそう言って、お客さんの褒め言葉に嬉しそうに笑い、「またいらしてください！」と笑顔で送り出していた。仕事だからとただ料理をするのではなく、１回ずつ心を込めて料理していたティナの笑顔を思い出すと今でも、笑顔で料理をしなくちゃね、と思える。

そして、私に料理を教えることの面白さと大変さを教えてくれたピラール。マドリードで老舗の料理学校を経営していたピラールは、古風ではあっても廃れることのないシンプルな料理の数々を教えてくれたが、私の耳には今も、ピラールがサラダをアリニャール（味付け）するときにつぶやいていたフレーズが聞こえてくる。「Echa aceite como los generosos, vinagre como los tacaños y sal como los puntuales.（オイルは気前のいい人に、酢はケチな人に、塩は几帳面な人にかけさせなさい）」。オリーブオイルはたっぷりと、酢は少なめに、塩はちょうど良い量を。かつてスペインのお母さんたちが娘に教えたというこのフレーズで、私は今も自分の生徒たちにサラダの味付けを教えている。

料理の原点は、家庭にある。どんなに華麗で洗練された料理の作るシェフも、そのルーツはお母さんの料理なのだ。だから私は、『毎日つくるスペインごはん』という本を書いた。ファニータの知恵やティナの愛情やピラールの教えを、１人でも多くの人に知ってもらうために。スペインの女性たちの素朴な家庭料理を大勢の人が好きになってくれたら、何より嬉しく思う。

Libro principal（主な著作）

毎日つくるスペインごはん
オリーブオイルと、卵と、じゃがいもと……
渡辺万里 著
現代書館
2019年6月刊
定価1,800円＋税
★ www.adelanteshop.jp で販売中!

Artículos publicados en ACUEDUCTO（一部抜粋）

○第04号 **特集「スペインの食・過去から未来への大胆な飛翔」**
○第12号 **「カディス食べ歩き・飲み歩き」**（特集「西欧最古の都市、カディス」）
○第14号 **連載「ブドウ色の地図から・スペインワインよもやま話」その1-その5**
○第16号 **特集「スペインのお菓子 DULCES ESPAÑOLES」**
○第23号 **連載「パンとチーズとワインがあれば - スペイン料理あれこれ話」vol.1-vol.10**
○第33号 **特集「エル・ブジのもたらしたもの」**
○第35号 **連載「オリーブオイル1本あれば！ - 日本の素材でスペイン料理 -」vol.1-vol.5**
○第38号 **「生ハムを使ったレシピ」**（特集「ハモンを堪能しよう！」）

言葉は生き物

Las palabras están vivas.

仲井邦佳

プロフィール

立命館大学産業社会学部教授。専門はスペイン語学。著書に『はじめてのエスパニョール』(共著、三修社)、『中級スペイン語―文法と演習―』(共著、同学社)などがある。

Artículos publicados en ACUEDUCTO

○第01号―第40号 **連載「スペイン語講座」**

これまでスペイン留学を3回経験しました。最初はナバラ大学外国人コース，2回目はバリャドリード大学大学院（同時に日本語教師も経験），3度目はサンティアゴ＝デ＝コンポステーラ大学に客員研究員として滞在しました。それぞれ，バスク文化圏，カスティーリャの中心地，ガリシア州の州都です。つまり，スペインの多様な文化圏の代表的なバスク，カスティーリャ，ガリシアで生活する経験をしたことになりました。

スペインという国の魅力は文化的（言語的）多様性であることは多くの人が認めるところでしょう。スペイン語世界ではバリャドリードの教養あるスペイン語が通常，標準的なスペイン語とみなされています（もっとも実際には，この地方独特の癖もあります）。

ナバラは特に北部にバスク語が残り，州都のパンプローナでも基本的にカスティーリャ語とバスク語の二言語標記です。カスティーリャ語の成立に際してバスク語は様々な影響を与えたとされています。例えば，v をb で発音すること（vivir を /bibir/ と発音）は v の音を持たなかったバスク語の影響と考えられています。

ガリシア語もまた興味深い言語です。ポルトガル語はスペイン語の姉妹語ですが，単純化して言うとガリシア語はカスティーリャ語とポルトガル語の中間的な性格を持っています。ガリシア語は私にはとてもやさしい響きに聞こえます。

スペイン語を教えるにあたって心掛けていることがあります。文法「を」教えるのではなく，文法「で」教えるということです。本誌のこれまでの連載では，アカデミックな文法書や一般の学習書とは異なる用語や説明をあえて使用した箇所があります。間違っているのでは？と思われた読者もおられるでしょうが，私なりの工夫を試みたつもりです。

日本人の学習者は文法用語に囚われ過ぎる傾向があるのではないかと思います。例えば，「接続法」という用語を気にし過ぎない方がよいでしょう。実際に「接続」，つまり従属節で使われることはもちろん多いのですが，独立文でも使われます。「接続法」はラテン語文法の名残であってスペイン語では必ずしもその性格を表現していません。

言葉というものは生き物です。歳月とともに変化するし，状況によって様々な使い方をされます。ぜひ現地のスペイン語世界で生活しながら学ぶことをお勧めします。

始まりはラテン音楽

伊藤嘉太郎

El comienzo fue la música latina.

半世紀あまり前。20歳代半ばに赴任したメキシコの現地会社で耳に奇異に響いたのが、¿Quiúbole?[*1] ¡Ándale, pues![*2] ¿Mandeee?[*3] ¡No, mano![*4] ¡Sí, cuate![*5] などの短い言葉だった。これは一体なんだ？　と訝った。いわゆる俗語表現で、現地では親しい間柄でごく普通に使われている。さらにやっかいなのはお悔やみの言葉である。“Mi más sentido pésame.” という短い表現があるが、気持ちを込めてこうした日常表現を実際に口にするのは、何度経験してもよそ者には難題だ。

スペイン語に関心を抱いたきっかけは、その昔高校時代に流行ったトリオ・ロス・パンチョスやディアマンテス等に代表されるラテン音楽である。軽やかで歯切れのよい心踊るようなテンポのギターメロディーに乗って唱われる歌詞がスペイン語だと知ってから、なんとしてもこの外国語を習ってラテンアメリカへ行きたいものだと夢想した。当時はまだ南米移民が行なわれていた。奇しくも地元の外国語大学にイスパニア学科が新設され、第1期生として入学したのがスペイン語の学びのスタートだった。大学では実に素晴らしい先生方や友人との出会いがあり楽しく学ばせてもらった。卒業後は海外事業拡大を目指していた電機メーカーに入社し、冒頭のメキシコ赴任へと繋がり夢が現実になった。

この赴任先は現地資本との合弁会社で、経営を巡って度々トップ会談が行われ、その都度通訳を仰せつかった。これは他に代わる人がおらず逃げ場のない仕事で、実にストレスが多かったが、語学力を高めてくれたことは確かである。長時間の会議でも自分なりに通訳メモの取り方を工夫し、後でまとめの議事録とは別に会議での双方の発言内容をかなり再現することができた。会議に不参加の関係者はこれで会議の雰囲気がよく分かると喜んでくれた。一方、日常業務ではマーケティングを担当し、社内のセールスミーティングで定期的に販売施策等を説明した。するとやり手の現地人のベテラン営業部長が、必ず最後に決まり文句で “El que pega primero pega dos veces.”（先手必勝）だ、他社に負けるなと言って、口は悪いが実に個性豊かだったセールスマンたちを叱咤激励したのを今でもよく覚えている。

また、ビジネスの場面で最初に苦労するのは顧客との電話である。特に、話の中で数字が出てくると慣れないうちは即座に頭に残らず戸惑ってしまう。万や億のつく大きな数字は、われわれ日本人が慣れ親しんでいる言い表し方とは異なるからだ。数字の聴き取りと口にするのはその気になって鍛えないとまず身につかない。

長年ラテンアメリカに関わって定年退職後、縁あってある大学の非常勤講師としてビジネススペイン語講座を受け持った際、テキストはすべて手作りして意図的に大きな単位の数字をたくさん例文に入れ込み、受講生にしつこく音読を課した。こうした様々な経験を踏まえ、本誌でビジネススペイン語講座を20回に亘って担当させてもらった。

今は気に入った原書を買い求めて読むのを楽しみにしている。

赴任先のメキシコにて。左から2人目が筆者。

プロフィール

長年の海外経験を活かし、大学でのビジネススペイン語非常勤講師などを歴任。

Artículos publicados en ACUEDUCTO

○第20号―第39号 **連載「ビジネススペイン語」**

*1 ¿Qué tal? のくだけた表現。どちらかというと男言葉。
*2 「OK、わかった、それじゃまた」と場面により様々な意味がある。
*3 元々は命令形の mande（お命じください、何かご用ですか）で「何か用？」、「何か言った？」という意味。"マンデー"と語尾を長く延ばして言う。
*4, *5 manoもcuateも「友達、仲間」で、メキシコの親しい間柄での俗語表現。

1999年、ブルゴス県の村コバルビアスの講習仲間たちと。

サラゴサ出身のピアニスト、故ルイス・ガルベ邸にて。ヘオルヒーナ夫人と筆者。

直感がスペインへと

下山静香

文化庁の在外芸術家研修員としてスペインに渡ったのは、20年前のことです。「スペインでピアノ修業をする！」と決めたものの、スペインに留学した先輩の話は聞いたことがない。インターネットもまだ今ほど普及しておらず、住む場所1つにしても何をどう調べたらよいのかわからないような状態でした。「こうなったら、とにかく行ってしまうしかない！」と、小さなトランク1つ携えてマドリードに降り立ったところから、私のスペイン体験は始まりました。

そして、数日後に落ち着いた安オスタルの部屋を当面の拠点に、何事も体当たりのスリリングな毎日が過ぎていきました。そのなかで痛感したのは、「ことばができなければ何も始まらない！」ということでした。スペインの人たちはコミュニケーション能力が高く、とにかくよく喋る。困っていれば誰かが助けてくれましたが、いざ生活するとなると、自力で乗り越えなければならない局面も多々出てきます。「以心伝心」「阿吽の呼吸」「忖度」など存在しない世界で、「言いたいことが言えない」のは「自分がそこにいない」のと等しいような気がして、時々切なくなりました。それは、スペインに発つ前、ピアノで息詰まって「音楽で表現したいことがあるのに、うまく伝えられなかった自分」と重なるものでした。その閉塞感から自由になって、本来の自分を取り戻したかった私が「スペイン」に引き寄せられたのは、スペインならきっとそれが果たせる、という直感が働いたからかもしれません。そのためには、音楽の修業だけでなく、メンタリティとも密接にかかわる「言語」領域を豊かにすることがとても大事に思えたのでした。

こうしてスペイン語熱に火がついた私は、学校と家とで毎日5～6時間の勉強を続けました。おかげで3ヶ月後には、早口会話が飛び交うアルモドバル監督の映画が理解できるようになっていて、我

La intuición me llevó a España.

プロフィール

桐朋学園大学卒。99年、文化庁派遣芸術家在外研修員として渡西、マドリード、バルセロナほかで研鑽。NHK-BS、Eテレ、フランス国営ラジオなどに出演。海外アーティストとの共演多数。CD《ゴィエスカス》《ショパニアーナ》など11枚、共著は10冊以上を数える。単著『裸足のピアニスト』、翻訳書『サンティアゴ巡礼の歴史』。2015年より「下山静香とめぐるスペイン　音楽と美術の旅」ツアーシリーズを実施。桐朋学園大学、東京大学 非常勤講師。日本スペインピアノ音楽学会理事。

www.facebook.com/shizukapianista17

裸足のピアニスト・下山静香のブログ
ameblo.jp/shizukamusica

★ ニューアルバム《Alma errante ～ さすらいの魂》中南米ピアノ名曲コレクションII・アルゼンチン編　好評販売中！

ながら驚いたものです。それは、こちらのレベルに構わずマシンガントークを浴びせてくれた、人懐こく愛すべきスペイン人たちのおかげでもあります。

コミュニケーションとは必ずしも、言語を正確に操れば済むというものではない。相手から時には予想のつかない球も飛んでくるし、ちょっとしたニュアンスが伝わり方を左右したりもする。けれど、常に真摯に、心を開いていれば恐れることはないのだという実感が重なるうちに、聴き手に音楽を届ける演奏家としての姿勢にも通じると思うようになりました。

そういえば、印象に残っていることがあります。ホアキン・ロドリーゴ生誕100年を記念して企画された、R. アルベルティの詩とロドリーゴのピアノ曲のコラボ公演に出演したときのことです。当時私は、日本ではまったく触れたことがなかったロドリーゴのピアノ曲に取り組んでいたのですが、片っ端から弾いていくうちに、その音楽から「カスティーソなスペイン」を感じとれるようになっていました（ロドリーゴの音楽の特徴に「ネオ・カスティシスモ」がある）。そしてこの日の舞台で、ピアノの前に座ってアルベルティの詩が朗読されるのを聴きながら、カスティーリャ語の響きってロドリーゴに合うなぁ、とも感じていました。

終演後、聴きに来てくれていたスペイン人の男の子いわく、

「シズカってほんとうは強い人なんだね。今日の演奏を聴いてわかった気がするよ」。

マドリードでひとり奮闘しながら、毎日目にする建物やすれ違う人々にパワーをもらい、ロドリーゴを弾いて……質実剛健なカスティーリャが私にもちょっぴり宿ってきたのかな、と嬉しくなった瞬間でした。

その後バルセロナ、サラゴサと移り住み、仕事の関係で帰国することになりましたが、スペインで暮らした日々は私の中で輝き続けています。そして、〈Quien no se aventura, no pasa la mar. 冒険しない者は、海を渡れない〉―― あの頃の心意気を失わずに、まだまだチャレンジしていきたいと思う今日この頃です。

Libro principal（主な著作）

裸足のピアニスト～スペインで学んだ豊かな表現と生き方～
下山静香 著
ヤマハミュージックメディア
2017年10月刊
定価1,800円＋税

Artículos publicados en ACUEDUCTO（一部抜粋）

○第01号**「スペイン式・男と女、そして音楽」**
○第05号**「愛と死をめぐる心模様 ― グラナドス《ゴイェスカス》―」**
○第11号**「サラサーテ～パンプローナが生んだ天才ヴァイオリニスト～」**
（特集「牛追い祭りの街、パンプローナ」）
○第13号**「セビリャが生んだ"音楽の風俗画家"～ホアキン・トゥリーナ～」**
（特集「春祭りの都市、セビリャ」）
○第14号**「日本・スペイン音楽面の交流」**（特集「日本スペイン交流400周年」）
○第19号 **連載「音楽の時間」**全18回

私の道にスペイン語があって。

Yuji Shinoda

永遠のロハ

Eternamente Loja

篠田有史

スペインとの付き合いは、今年でちょうど40年になる。1年をかけて東回りの世界一周の旅をした時のこと。最初の国・米国で、ある写真家の遺作展をやっていた。その中に「スパニッシュ　ビレッジ」という組写真があった。これは行かなくてはと思った。

スペインにたどり着いた時には、世界一周も半ばを過ぎていた。移動の連続で、ここらで少しのんびりしたいと思った。スペインではほぼ英語は通じない。大学のスペイン語科に行っていた友人から、スペイン語の本を送ってもらい、この本を携えてアンダルシアの小さな鉄道駅で降りた。

こじんまりしたhostalに宿をとり、町を歩いた。坂を下り橋を渡ると、学校があった。高校のようだった。そこの生徒と仲良くなって山に登った。日本と違ってほとんど木の生えてない岩だらけの山だ。一緒に登った2人の生徒は授業をさぼった。その1人が「父はalcaldeなんだ」と言った。辞書を調べると市長。きっと立派な屋敷に住んでいるのだろう。

家を訪ねると、予想に反して大邸宅ではなかった。一軒家でもなく、pisoと呼ばれる古い集合住宅の2階だった。広くもなく、子どもたちは6畳ほどの部屋に2段ベッドを2つ置いて、兄弟5人が寝ていた。一番下の女の子だけは、狭いが1部屋を与えられていた。住んでいるのは、社会主義者の市長さん夫婦と子どもの計8人だった。最初に出会った高校生は長男だった。

ある日、三男が「泊まることはできないけど、8人食べるのも9人も同じだから、ウチで食べたら」と言ってくれ、滞在中の昼食と夕食はそこで頂くことになった。こうしてぼくは、3週間あまりをグラナダ近郊のLojaという小さな町で過ごした。

あれから40年が過ぎ、元市長さんたちは、町の中央公園に面した3階にあるpisoに引っ越した。6人の子どもたちは独立して、Lojaを離れていった。あの頃、Lojaのメインストリートを走る車はあまりなかったが、今では駐車するのも大変になった。近くに大きなスーパーがいくつかできて、主婦が店主と会話を楽しみながら買い物をするtiendaはほとんど姿を消した。が、barは今もたくさんある。

スペイン語に関しては文盲といってもいいが、Lojaで写真展をひらいたとき、インタビューを受けるにあたって1つのフレーズを覚えた。

Donde quiera que esté, estaré siempre con Loja.（どこにいても、ぼくはLojaとともにある）

今も毎年、スペインを取材で訪れる。マルティン家の人々との交流も続いている。

プロフィール

1954年岐阜県生まれ。フォトジャーナリスト。24歳の時の1年間世界一周の旅で、アンダルシアの小さな町Lojaと出会い、以後、ほぼ毎年通う。その他、スペイン語圏を中心に、庶民の生活を撮り続けている。【写真展】富士フォトサロンにて『スペインの小さな町で』、『遠い微笑・ニカラグア』など。【本】『ドン・キホーテの世界をゆく』（論創社）『コロンブスの夢』（新潮社）、『雇用なしで生きる』（岩波書店）などの写真を担当。

Artículos publicados en ACUEDUCTO（一部抜粋）

○第10号 **連載「Eco España」vol.1～vol.16**
○第26号 **特集「スペイン21世紀ワイナリー巡り」**
○第32号 **連載「Vida en Latinoamérica」vol.1～vol.2**
○第36号 **連載「スペインの老後の暮らし」vol.1～vol.3**